かなだけでは精密な思考ができない

「こう水」や「はな」「みる」という表記では、思考力が育だない。「洪水」「香水」……「花」「鼻」……「見る」「看る」……という表記で言葉を学習しないと、概念をはっきり理解することができず、言葉があいまいになり、精密な思考ができなくなる。だから、言葉を漢字で教える。――これがわたしどもの漢字教育なのです。

昭和 41 年 3 月、朝日新聞は「石井方式を考える」という社説を掲げ、「石井方式はよく“漢字を教える教育”のように言われているが、そうではない。“漢字で教える教育”である」と解説しましたが、いまでもなかなかこのように理解してくれる人は多くありません。

たとえ漢字が書けるようにならなくても、漢字を覚えて漢字で学習することにより、言葉の持つ意味を正しく理解できれば、十分とは言えないまでも、それで結構だ、とわたしは考えています。ですから、漢字を学ぶことを目的とする漢字教育ではないのです。

もちろん、できるだけ漢字が書けるのに越したことはないし、じっさいに漢字で学習していれば、いつとはなしに、漢字を覚えてしまうものです。

平安朝の昔から、かなは女手、漢字は男手と呼ばれて、漢字はむずかしいものだと考えられています。たしかに字数が多いばかりでなく、字形が複雑なので、いかにもむずかしそうに見えます。

しかし、漢字は、文字であると同時に、語でもあるのです。たとえば山･川･花･月などの文字は、英語の mountain, river, flower, moon という語に当たっています。英語の場合、アルファベットだけ覚えても文章を読むことはできません。一語一語、何千という語を学ばない限り、書物を読むことはできないのです。

とすれば、漢字は字数が多く、字形が複雑なのは当然のことなのです。「整」という一字など、英語になおせば、「to put (things) in order」という言葉になります。つまり、「束」が「things」で、「攵」が「put」の意味に当たり、「正」が「order」の意味を表わしているのです。これだけの意味を、ただ一字で表わしているのですから、その字形が複雑になるのは当然とわかりましょう。

整という字を構造的にいうならば、木に輪をかけて「束」をこしらえ、これがきちんとそろうように、棒を手にしてたたく（攵はで、手に棒を持つ意味、牧、教、攻の攵は皆この意味）ことで「正」しくなり、すなわち「整」うのです。